

北島義信（四日市大学名誉教授）

土着的近代の構造化と地域研究

【欧米型近代】

1970年代において、「途上国」の多くは、欧米の政治・経済・文化の一体的支配の下にあったが、その根幹には「文化支配」が存在していた。それは、「欧米近代」の「自我」「理性」を基軸とした「思想・文化」を唯一の「普遍的基準」とするものであり、相互関係性を拒否し、外部性としての「他者」を拒否し、「欧米 VS 非欧米」の優劣「二項対立」の形態をとったものであった。（男女の人間としての一体性を否定した、男性>女性、女性蔑視が「近代」世界において強化定着したのも、「欧米型近代」と結合している）。「近代化」を目指す「途上国世界」の多くの知識人は、19世紀中期以降、自らの思想・文化を「劣ったもの」として拒否し、欧米化することが「近代化」だと捉える方向性が「定着」するようになった。

* 「オリエンタリズム」：「オリент（非欧米世界）」に対するヨーロッパの「思考の様式」

（二項対立、外部性としての他者否定、普遍的基準としての欧米近代）と「支配の様式」←エドワード・サイード。

* 「アリア・モデル」：エジプト・フェニキア文明から「切り離された」ギリシア文明＝普遍的基準←マーティン・バナールの『ブラック・アテナ』

* 東アジアにおける「開化」論：福沢諭吉の「脱亜入欧」、丸山の近代化論など←欧米近代基準。

※ 「欧米型近代」「アリア・モデル」には、古代ギリシア文明の基盤となる古代エジプト・フェニキア文明（アフロ・アジア的文明）、「近代」西洋の文化的骨格をつくったイスラーム文明の「剽窃」が存在する。それゆえ、そこにはアフロ・アジア的文明、イスラーム文明に対する「憎悪」が根深くみられる。「開化論」も基本的には同じ構造←東アジアの土着文化の拒否。

「脱亜論」：福沢諭吉の中国・韓国の植民地合理化論。欧米型近代を「明治維新」によって成し遂げた「近代日本」＝近代天皇制としての「国民国家」

【土着的近代】

しかしながら、1970年代のイラン、南アフリカ、インド、ラテンアメリカなどでは、イスラーム、キリスト教、土着思想、ヒンドゥー教などの地域に根差した宗教・文化の核心と、

抑圧支配の構造認識・その打破の課題とを繋ぐことによって、人間解放と現実変革を目指す社会政治運動が共時的に起こり、それらは大きな成果をもたらした。「社会主義思想」を含めて、「欧米近代思想」に依拠しない、民衆に支持されたこの現実変革運動は、「欧米型近代」を目指すものではなく、生活に根差した、本来の共生的「近代」を目指すものであった。

このような、土着の宗教・文化を基軸とした社会変革運動には、相互関係性、自由平等、差異と平等の併存、万物平等、男女平等、他者尊敬、共に助け合う公共性、愛（慈悲）、一即多・多即一、人間と自然の非分離性、個の尊重、非暴力・平和、修復的司法、赦しと和解、多宗教共生などの、自己中心主義を超えた人間の共生、人間・自然復興の基本概念が共通にみられる。これらの諸概念は、「非欧米世界」「途上国世界」のみならず、「欧米社会」が人間化するためにも必要なものである。このような諸概念は、板垣雄三先生が「7世紀スーパー近代」論で指摘されるように、西暦7世紀には東・西アジアでは、イスラームや「華嚴仏教」において体系化されたものである。

土着的近代の構造的理解に向けて

【近代とは何かの捉え方の検討】

- ・発展的歴史観の検討：その発展の頂点は「欧米型近代」か？「発展」とは何か？（つねに「発展」を前提とすると、地球が7個必要という説もある）。「国民国家」形成や資本主義的生産様式が真の「近代」の普遍的メルクマールになりうるのか？
- ・7世紀に東・西アジアで形成された華嚴仏教、イスラーム文明の共通性（相互関係性、差異と平等の併存、男女平等、他者尊敬、多様なものによる「一」の形成、非暴力平和など）とそれを実現させる社会システムの存在に、近代を見るという視点の重要性→ゆがんだ「欧米型近代」を非暴力的共生平和的近代の形成への転換。
- ・欧米型近代（植民地主義支配）を強制された側からの「近代」の構築と「7世紀近代」の関係性。
- ・「一国」ではなく、地域（例えば東アジア）の中に国家を位置づけ、国家を相対化する視点。

【土着文化の捉え方の検討】

- ・世界の土着文化に共通にみられる普遍性を基軸にした近代の構築→「再び開闢」、本来の近代性（相互関係性、相異なるものの「一」の形成に基づくテクノロジー、社会体制・制度の人間化）。
- ・民衆に最も身近な土着文化の把握とその状況化（歴史的コンテクスト）→土着的近代
- ・非抑圧者こそが土着文化と近代を結合させる有効な力を持ちうる→韓国の東学、円仏教、ガンディーの「サッチャーグラハ」、南アフリカの「ウブントゥ」など。
- ・土着文化の状況化のベースとなるのは、地域に根差した仏教、道教、儒学、イスラーム、

シャーマニズム（巫教）などである。歴史的には、19世紀中期～20世紀初期、20世紀70年代、に多く見られるが、13世紀の鎌倉新仏教、17世紀の熊沢蕃山の思想にもみられる。

- ・「土着文化」の無批判的絶対化は、「開化」を支えるものとなる→「大東亜共栄圏」。
「土着文化」の批判的・状況的把握（親鸞の仏教把握、崔濟愚の儒学把握、円仏教創始者・少太山の仏教の把握）は、「近代」構築の実践へと結びつく。
- ・実心実学は土着的近代と内容において、共通点が多くみられる。
- ・土着文化における男女平等論、ジェンダー問題解決の道の「再発見」、欧米型近代の社会的システムが生み出した女性差別（男は工場で働き、女は家庭を守る→労働力再生産のシステム）。欧米近代中産階級の「女性解放論」の問題点と「途上国」における女性の社会的地位の高さ（アフリカ）。日本における女性差別の深刻さの原因と社会システム。

【土着的近代研究の場の設置】

「土着的近代」研究は、特定の地域を超えた、大地に根差した土着の宗教・文化の核心を現代の課題と結合させるものであり、それによって非暴力平和共生世界の構築に貢献するものとなりうる。これは「正解」を求めるものではなく、「地域」、「時代」「研究分野」を横断する多様な立場の学際的な研究の集積によって次第に具体化が進むものである。このような立場に立つとき、崔濟愚と親鸞の思想的共通性と現代性、熊沢蕃山の現代性、開化と開闢、実学と欧米近代、イスラームと欧米近代、社会主義と建神主義（ルナチャルスキー）、ガンディーの「サッティヤグラハ」とルーサ・キング牧師、デズモンド・ツツとアフリカ土着思想、安藤昌益と共生社会、国民国家形成など、検討すべき課題は多いといえる。

それぞれの研究分野で、関心あるテーマを選んで自由に問題提起をおこない、討議の中で土着的近代の内容を深めていきたいので、ぜひ皆様にご参加いただきたいと思います。

具体的展開（案）

1. 構造的な問題提起、実学との関係
2. 個別的地域の事例（欧米近代と鋭く対立するイスラーム文明を学ぶことは重要）
3. 個別的な事例間の共通性
4. 「原理主義」、「近代主義」、と「土着的近代」
5. ジェンダーと土着的近代
6. ロシアの共同体論などについては、研究会の内容が充実する中で検討する。

研究会の運営について

2～3か月に一回程度、報告を行う。現在、正泉寺国際宗教研究所（所長：北島義信）から「土着的近代研究」（文理閣）を2023年1月に発刊を予定しているので、とりあえず、執筆者（板垣、片岡、大橋、趙晟桓、櫻井、北島）から始めてはどうか。